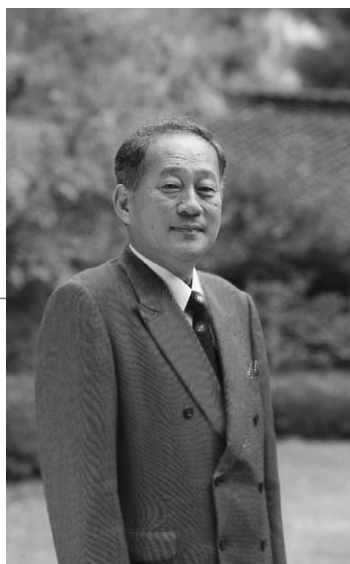


学校法人同志社 新理事長に 八田英二氏が就任

2011年10月29日開催の定例理事会において、任期満了にともなう理事長選任が協議され、新しく八田英二理事が理事長として同日付就任することが決議されました。

八田理事長は、大学長を務めて5期15年目となり、2012年度には、教学体制の再構築を根幹とする教育改革の中長期計画が最終段階を迎えます。大学長としてのこれまでの経験を生かし、「同志社200年の大計」に向けてさらなる活躍が期待されます。



【新理事長の略歴】

八田 英二（はった えいじ） 1949年3月20日生

1971年3月 同志社大学経済学部卒業

1973年3月 同 大学院経済学研究科修士課程終了

1974年4月 同 経済学部助手

1977年6月 カリフォルニア大学（バークレー校）大学院
経済学Ph.D.コース修了

1985年4月 同志社大学経済学部教授

1996年4月 同 経済学部長

1998年4月 同志社大学長、同志社理事

現在

学位

Ph.D.

研究分野 産業組織論、計量経済学

「教科センター方式」となって1年 これからの授業のあり方

中学校・高等学校教諭 井口和之

3年生の社会科で、フィールドワークや街頭アンケートなどを実施すること、ネット上の資料のみに頼ることは不可という点以外は自由という条件で、グループ発表の課題を行った。写真は、「自動販売機について」をテーマにしたグループの様子。自販機の着ぐるみを着て登場した女の子にクラス全員が爆笑。最高の「つかみ」で発表が始まった。後で聞いた話では一家総出で手伝い、当日は母親が車に着ぐるみを届けたほどの気合の入りのり。劇を交えながら、日本中の自販機が本当に必要なのか、「節電」が求められている今だからこそ、しっかりと考えなければならぬ、と問題提起したことが生徒の間で高く評価された。

生徒たちが訪問した先は、刑務所、裁判所、探偵事務所、児童相談所、関西電力京都支店、法律事務所、市役所、病院、など多岐に及んだ。

生徒たちは、教師からの高い評

価を得ようとしていなかった。純粹に調べたことを一生懸命に伝えようとひたむきに努力していた。それが見る側に伝わるからこそ、教室空間として、すばらしい「学びの空間」が実現したといえる。発表後に、「どうだった？」と聞いてくる生徒はおらず、生徒同士で「すごかったなあ」や「負けへんで！」といったやりとりが飛び交っていたのも期待以上の教育効果だった。教師の評価を気にするのではなく、聞かせたい聴衆（伝えたい相手）から高い評価を得ようとしたのだ。

発表間近となった日の昼休みや放課後は、社会科教室周辺で小道具を作成する者や発表原稿を打ち合わせる者など、生き生きとして

いる様子が窺えた。教科専用の空間を持っている教科センター方式だからこそ風景だろう。



「伝統」という文化の「仕掛け」

—同志社女子大学・関口ゼミ
×TNCプライダルサービス×半兵衛麩
婚礼企画プロジェクト—

関口英里 女子大学学芸学部准教授

同志社女子大学学芸学部情報メディア学科・関口ゼミでは、「文化装置の読解」をキーワードに、現代の消費文化をめぐる状況について、多様なトピックの分析を通して研究活動を行っている。理論的な学びだけでなく、企業とのコラボレーションも積極的に取り入れ、「仕掛ける」立場から、企画力、行動力を身につけることも目標である。

その一環として、毎年度の2年次生ゼミにおいてTNCプライダルサービス（京都市中京区）と連携し、京都の伝統産業の活性化や京文化の掘り起こしを目的に、現代のニーズに合わせた婚礼プランを企画立案している。これまでも「源氏物語」や「京くらしつく」等多様なテーマを展開し、実績を積み重ねてきたが、連携4年目の2011年度は、1689（元禄2）年創業の半兵衛麩（東山区）とも連携し、三者による新機軸のプロジェクトを行った。「京都で

つなぐ家族の絆」を主題に、「ふうふ支度の儀」と題した企画を完成させ、2012年2月より販売が開始されている。

今や日本の婚礼は洋風化が進む一方、結納のような日本古来の儀式は縮小傾向にある。しかし昨今では、人々の繋がりが求められ、日本文化のアイデンティティが強く意識されるようになってきている。そこで婚礼においても、家族の「絆」を強め、有形無形の伝統文化に新たなスポットを当てる工夫が必要であると考え、京都ならではの様々な要素を盛り込んだ儀式と祝い麩商品を独自に考案した。

学生達は今回の取り組みを通じて、伝統とは、実は不断の創造活動に基づく「文化の仕掛け」なのだ、ということ学んだ。本企画の意義は、消費者のベネフィットを考えた商品開発や京都の伝統文化・産業の振興という当初の目的に留まらず、学生達自身が日本文化の本質を実践で学び、成長した



教育的効果にもあったと考える。今後のゼミでも「文化装置」を多角的に読み解く試みを継続してゆきたい。

第16回 国際交流に関する エッセイコンテスト

法人部法人事務室



日本語部門 入賞者

大学生の部	
最優秀賞	浅尾 雅俊様 (大学神学部4年)
優秀賞	本田 美美様 (大学商学部3年)
佳作	小野寺恵介様 (大学スポーツ健康科学部4年)
高校生の部	
最優秀賞	岡本 実樹様 (高等学校2年)
優秀賞	伊藤 舞花様 (高等学校1年)
佳作	森元 茜様 (高等学校1年)
	山根久美子様 (高等学校1年)
中学生の部	
最優秀賞	岩本 蘭様 (中学校3年)
優秀賞	相山 由衣様 (中学校3年)
佳作	中山 めぐ様 (香里中学校2年)

英語部門 入賞者

大学生の部	
最優秀賞	該当作なし
優秀賞	クローチ コートニ様 (KCJSエモリー大学4年)
佳作	該当作なし
高校生の部	
最優秀賞	斉藤 萌栄様 (国際高等学校2年)
優秀賞	小阪裕里江様 (高等学校3年)
	豊住 京子様 (国際高等学校3年)
	森川 綾子様 (国際高等学校3年)
佳作	中嶋 晴様 (高等学校3年)
	山崎 秀貴様 (高等学校3年)
中学生の部	
最優秀賞	水江 真子様 (国際中学校3年)
	野間 亜未様 (国際中学校1年)
優秀賞	福本 拓真様 (国際中学校1年)
	山口祐里瑛様 (国際中学校1年)
	森口 采美様 (国際中学校1年)
	田中 友清様 (中学校2年)
佳作	岡田 美奈様 (国際中学校1年)

国際交流に関するエッセイコンテストは、同志社国際主義教育委員会が、法人内各学校における国際交流プログラムの一貫として、法人内各学校の学生、生徒が国際交流や国際問題に関する考えを発表する機会として実施しています。第16回目となる2011年度は、「21世紀における人類の課題と夢」もしくは「国際交流と私の将来」をテーマとしたエッセイを募集し

ました。「国際交流」というと、留学体験や外国文化に触れるという視点で捉えられることが多いですが、そこから1歩踏み込んだ多彩な作品の応募がありました。例えば、東日本大震災の経験を通しての考えや、文化の違いを比較し冷静に自らの価値観を見直したり、また、海外に目を向けるのではなく日本での国際的な仕事に関する目標を

述べるといった、国際交流に関する真摯な思いや夢が綴られています。それらの作品の中から、審査委員会の厳正な審査により受賞者を決定し、1月30日に大学クラーク記念館クラーク・チャペルにおいて表彰式を行いました。日本語部門、英語部門それぞれの受賞者に対して、大谷實総長から表彰状と副賞が授与されました。

第169回 新島襄生誕記念会

2012年2月13日、第169回新島襄生誕記念会が学校法人同志社、同志社校友会、同志社同窓会の主催により、同志社新島会館大研修室で開催され、大勢の参加者が集い、新島襄の生誕を祝った。生誕記念会では礼拝に引き続き表彰が行われ、新島研究論文賞が布施田哲也氏（公立丹南病院副病院長）に、新島研究功績賞が大鉢忠氏（大学理工学部教授）に授与された。また、新島襄生誕記念懸賞論文の表彰も行われ、中学校の部では、奥村美大さん（女子中学校1年）、高等学校の部では、生嶋真帆さん（国際高等学校3年）に最優秀賞が、他14名の方に優秀賞と佳作が贈られた。

その後、新島研究論文賞を授与された布施田哲也氏により「新島襄…小冊子との出会いと持病について」（真理易知トリウマチズム）の演題で講演が行われ、盛況のうちに会は終了した。



第16回 同志社 国際主義教育講演会

法人部法人事務室



1月27日（金）、寒梅館ハーディーホールにおいて、国際日本文化研究センター所長（本講演時）の猪木武徳氏を講師にお迎えし「大学と人文学教育」の演題で第16回目の同志社国際主義教育講演

会を開催した。
まず、猪木氏は、大学の外的状況として国家間や大学間の競争が激化している事を指摘され、このような傾向に対しては、グローバル化の趨勢に対応しながらも、長

期的な視点からは教養教育を守らなければならないことを述べられた。そして、デモクラシーという制度は実際の知識を重んじ、教養を軽視しやすいこと、具体的には、選抜しやすい専門知識の重視、私智の偏重、定型的な知識に重きを置く傾向にあることについて触れられ、この傾向は世界的であるが、日本は特に深刻である旨、紹介された。
続いて、人文学と教養の同義性について解説され、「人文学教育はわれわれの独立心、日本の地方自治の精神、勇気ある外交姿勢を可能にする。その意味で人文学は善き社会、善き国家の基礎となること」を強調され、講演を結ばれた。
当日は、一般市民、学生、教職員などが、ご自身の経験を交えた猪木氏の講演に熱心に聞き入り、質疑応答も活発に行われ、盛況のうちに講演会を終了した。

同志社キャラクター 「八重さん」誕生

NHK2013年大河ドラマ『八重の桜』の主人公に同志社の創立者・新島襄の妻、新島八重が選ばれました。
これにちなみ、2011年11月6日に学校法人同志社「八重の桜」関連プロジェクトから、同志社キャラクターの「八重さん」が誕生しました。今後、学校法人同志社の広報の一翼を担います。

新島八重（旧姓 山本）は、会津藩の砲術指南の家に生まれ、明治の初めに戊辰戦争で会津が戦場となった時には鶴ヶ城に立て籠もり、自ら女ながらも銃を指導し戦いました。

襄と結婚してからはキリスト教を学び、男女平等で西洋式の生活を夫とともに実践します。襄は彼女の人柄について、アメリカの養母であるハーディー夫人に「彼女は見た目は決して美しくはありません。ただ、生き方がハンサムなのです」と、自らの意思で行動す

る八重のことを絶賛する手紙を書き送っています。
襄が亡くなった後は、日本赤十字社の篤志看護婦として、また裏千家の茶道師範として自立した生活を送りました
八重に関して、同志社には数々のエピソードが伝わっています。そのどれもが、八重の凛とした生き様、時には厳しく頑固な面もみ

同志社キャラクター 八重さん



※「八重さん」は、学校法人同志社100%出資会社「株式会社同志社エンタープライズ」の商標です。

えますが、内に秘めた「優しさ」と「聡明さ」を伝えていきます。
その1つに、襄は妻に自らを「襄と呼ばせ、自らは、八重を「八重さん」と呼んでいたというエピソードがあります。今回の新キャラクター誕生ではこのエピソードに基づき、創立者・新島襄に倣って、親しみを込めて「八重さん」と呼ぶことにしました。

第1回 同志社 中学生・高校生 英語大会—立石杯— Recitation & Speech Contest

法人部法人事務室

同志社
ナウ

2月19日(日)、神学館礼拝堂において、第1回目となる同志社中学生・高校生 英語大会—立石杯— Recitation & Speech Contest を開催しました。

今年度、同志社法人内中学校・高等学校では、立石信雄氏からの寄付金(立石ファンド)により、英語能力の向上を図り、国際社会に貢献できる生徒の育成を目的として各種プログラムを実施しています。その一環として、第1回目となる法人内中学校・高等学校における英語大会を実施し、寄付者である立石信雄氏にもお越し頂きました。

発表者は、部門を問わず各学校から3名ずつを選出し、当日は、中学生の部 (Recitation Section) I部門(海外在住、留学経験通算1年以上の者が対象) 3名・D部門(1部門以外が対象) 9名・高校生の部 (Speech Section) I部門4名・D部門8名の計24名が出場しました。最優秀賞には、

国際高等学校3年森川綾子さんの「The Truth Behind a Rainbow Nation」が選ばれました。

当日は、参加者を含め150名を越える来場者があり、中高生による白熱したRecitationとSpeechに魅了されていました。

